

平成21年5月15日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006～2009

課題番号：18520385

研究課題名（和文） 16-20世紀日記・書簡資料の英語史研究への貢献

研究課題名（英文） Contribution of Non-Literary Texts Such as Sixteenth to Twentieth-Century Diaries and Correspondence to History of English Research

研究代表者

中村 不二夫（NAKAMURA FUJIO）

愛知県立大学・文学部・教授

研究者番号：20149496

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・英語学

キーワード：英語史 近・現代 日記・書簡 助動詞 do 進行形

1. 研究計画の概要

英語史研究は、伝統的に文学作品の言語研究が中心であった。これに対し、申請者は、学生時分以来一貫して、1500-1950年に書かれた出版を意図されていない私的な日記・書簡資料の分析を通して英語の文法と語彙の歴史を正すことを研究課題としてきた。これらの資料は、言語変化の最前線を知る、語法の時代的欠落を補う、消滅したはずの語法が存続しているかどうかを探求する、未発見ないしは報告例がまれな語法を発掘する、語法に対する当時の生の証言を収集する上で貴重だからである。

そこで、本研究では、(a) IntelLex社から頒布されているCD-ROMデータベース（Past Mastersシリーズの16-20世紀書簡資料の中から申請者が予算に合わせて精選した資料が、1枚のCDに収められ販売される電子コーパス）から助動詞 do と進行形の用例を収集し、書籍の形の日記・書簡150冊に基づいて調査してきたこれまでの研究結果をさらに補強すること、(b) 書籍資料と電子コーパスの両面からの比類なき大規模研究により、従来の英語史研究の欠落部分を補うこと、以って、(c) 遅れのみられる世界の後期近代英語の研究に、日本発の異彩を放つ研究を顕示すること、これら3点を研究課題に据えた。

2. 研究の進捗状況

「研究計画調書」に則り、the Emerging Tradition (1500-1700), The Eighteenth Century, The Romantic Age, The Modern Era: 1800-1950の4期分について、年次進行とともに、助動詞 do の用例とその統語的異形、進行形とその統語的異形の用例を収集した。

さらに、現有していたCD-ROMコーパスや書籍の資料の調査結果を発表した。項目5のとおりである。論考執筆8件、国際会議口頭発表2件、海外でのゲストレクチャー1件、国内学会シンポジウムの司会兼講師1件を数える。

具体例を挙げるならば、2006年5月、近代英語協会第23回大会において、シンポジウム「言語変化と語彙拡散／収束の諸相」の司会兼講師を務めた。その骨子を、2年後に項目5〔雑誌論文〕②に載せた。2007年3月、③により、否定辞 not が-ing形に後置される構造の盛衰を通して、助動詞 do の発達の隠れた側面を浮き彫りにした。同月、〔その他〕①のとおり、ヘルシンキ大学で1時間のゲストレクチャーと30分の質疑応答を行った。同年8月、〔学会発表〕②のとおり、第40回ヨーロッパ言語学会で口頭発表を行った。発表内容は、2010年1月にドイツのPeter Lang社から刊行される書籍に掲載されることになっている。2008年8月、〔学会発表〕①のとおり、第15回国際英語史会議で口頭発表を行った。

このように、特にヨーロッパでの活動を通して、英語史研究は長い伝統を持つが、21世紀初頭の今日でさえ、未踏の日記・書簡資料を分析すれば日本人にも稀有な語法・未知な語法の発掘や言語変化の最前線の修正が可能であるということを、世界の研究者たちに知らしめた。

3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

(理由)

地道な基礎研究であるため量産はできな

かったが、本補助金で購入した IntelLex 社 CD-ROM コーパスの、have の進行形、受動進行形、分詞や動名詞の進行形、-ing 形の否定、助動詞 do のデータ処理を行ってきた。この作業が円滑になったのは2年目からで、2007年3月の科学研究費出張により、コーパス言語学の先駆的研究を行っているヘルシンキ大学と Freiburg 大学で調査・研究に従事し、コンピューター分析法の手ほどきを受けた点大きい。貴重な用例も発掘したので一刻も早く英語で発表したいが、参考文献を網羅していなければ学術研究の体をなさないため、多くは電算処理済の段階で止まっている。そのため、達成度についての自己評価を最上位にすることを慎んだ。近い将来、これらの歴史的意義を述べ、日記・書簡資料の英語史への貢献を実証したい。

4. 今後の研究の推進方策

本研究をさらに複数年度継続し、世界の誰よりも大きなデータに裏打ちされた研究を行い、その成果を頻繁に国際会議等を通じて世に送り出し英語史実を明らかにすることは学問の発展に資するのではないか。このような構想を抱き前年度申請を願い出たところ、幸運にも採択された。今後も、近代英語協会を始めとする国内学会に出席し最新の学説の吸収に努めるとともに、新研究課題「16-20 世紀日記・書簡資料の英語史研究への貢献—更なる展開」の下、助動詞 do と進行形に加え、疑似助動詞 be coming to-不定詞の歴史、「prevent/save/stop/etc. + 目的語 + from+ 動詞-ing」構造の from の脱落、be tired に続く前置詞の変化、beloved に続く前置詞の推移、elder/eldest から older/oldest への交替の歴史等を解き明かす。そして、その成果を国際会議の場で披露したい。英語史研究の中で、日記・書簡の英語を集中的にしかも大量に分析した研究は類例がなく、申請者が本研究課題および新課題によって行おうとしている書籍資料と電子コーパスの両面からの大規模研究は、国内外の研究の中で異彩を放つ可能性を大いに秘めていると判断される。

なお、本課題研究成果の印刷・製本は義務ではなくなった旨、本学研究支援グループ担当者から平成 20 年度中に連絡を受けたが、せっかくの研究を形あるものとしてほしい。当初の本受給研究満了後の 2010 年 6 月を目指し、好評だった〔学会発表〕①の Not 後置型-ing 形の盛衰について、助動詞 do の発達との関わりの中で、400~500 ページの著書にまとめる計画である。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 8 件)

- ① 中村不二夫、「Not 後置型-ing 形の盛衰—助動詞 do の発達の隠れた側面 (4) *OED*² on CD-ROM を根拠に (下)」、*Mulberry*、第 58 号、pp. 63-105 [A5 判]、2009、査読なし
- ② 中村不二夫、「受動進行形の動詞の拡散、能受動進行形の動詞の収束」、『英語青年』(研究社)、第 153 巻第 12 号、pp. 46-49 [B5 判 2 段組]、2008、査読なし
- ③ 中村不二夫、「Not 後置型-ing 形の盛衰—助動詞 do の発達の隠れた側面 (1)16-20 世紀日記・書簡資料を根拠に」、『愛知県立大学文学部論集 (英文学科編)』、第 55 号、pp. 41-86 [A5 判]、2007、査読なし

〔学会発表〕(計 3 件)

- ① 中村不二夫、“Uncovering of rare or unknown usages: a history of participles/gerunds followed by *not*”, 15th International Conference on English Historical Linguistics, University of Munich (「稀有または未知の語法の発掘—not 後置型-ing 形の歴史」、第 15 回国際英語史会議、於ミュンヘン大学 [ドイツ連邦共和国])、2008 年 8 月 26 日
- ② 中村不二夫、“Uncovering of rare or unknown usages: a history of *seem* meaning ‘to pretend’”, 40th Annual Meeting of the Societas Linguistica Europaea, University of Joensuu (「稀有または未知の語法の発掘—動詞 *seem* 「~のふりをする」の歴史」、第 40 回ヨーロッパ言語学会、於ヨエンスウ大学 [フィンランド共和国])、2007 年 8 月 31 日

〔その他〕(計 1 件)

- ① 中村不二夫、“Uncovering of rare or unknown usages: contribution of non-literary texts to history of English research” (「稀有または未知の語法の発掘—非文学テキストの英語史研究への貢献」、ゲストレクチャー、於ヘルシンキ大学 [フィンランド共和国])、2007 年 3 月 13 日